文化構想学専攻

表現文化学

アジア文化学

文化資源学

人材育成の目標

さまざまな文化や文化的事象を、社会的実践の場において積極的に活用することで文化のもつ力をさらに高めるとともに、現代社会が抱える諸課題の解決に資する文化を主導的に構想することを目的とする。新たな文化の創出、比較文化的・多文化共生的な認識、文化の応用的・実践的活用のそれぞれにたいする専門的知見を併せ持ちながら、文化や文化的事象をさまざまな課題解決に活用することができる能力を習得させる。研究者、専門職業人のいずれの進路においても、文化の活用を理論と実践の双方で牽引できる人材を養成する。

表現文化学専修

文化構想学専攻

専修紹介

「表現文化学」は、その名称にあるように「文化」を対象とする研究のセクションまたアプローチです。もちろん、あらゆる人文学の研究領域は何らかのかたちで人間の作り出した「文化」を研究対象としているわけですが、「表現文化学」は次のようないくつかの特徴において従来の文化研究とは異なるスタンスをとることになります。

（1）トランスナショナルな文化のダイナミズムへの視点

「表現文化学」は、特定の言語圏・文化圏の内部に限られた文化現象の研究を排除するものでは決してありませんが、トランスナショナルな文化の力学を考察する諸理論を積極的に吸収しながら、それら先行する研究分野を更新・発展させることを目指しています。

（2）さまざまな〈表象〉の形式への視点

「表現文化学」では、言語にもとづく文化的表現だけでなく、映像、音響、身体表現などあらゆるメディウムに依拠する文化現象が分析の対象となりえます。

（3）ポピュラーな文化現象への視点

「表現文化学」では、伝統的な人文学において文化的対象として十分に取り上げられることがなかったサブカルチャー、ポップカルチャー、モード、広告、身体表現などをも重要な研究対象とするとともに、そうした対象を考察するのにふさわしい方法論を探求します。

（4）現代的・理論的視点

「表現文化学」の特徴は、たとえある程度過去にさかのぼる文化現象を対象とするにせよ、その対象を単に過去のものとして研究するのではなく、現代におけるアクチュアリティに結びつけていく視点から取り上げます。

教育方針

[複数指導体制による開かれた論文指導]　本専修では、修士論文ならびに博士論文執筆にあたって、主担当・副担当による個別指導とあわせて、定期的に合同発表の機会を設け、専修の教員全員が論文執筆の相談にあたる開かれた指導体制を取っています。

[研究者のみではなく高度専門職業人の養成をも重視する]　現代の文化現象を扱う本専修では、修了生の進路として、研究者はもちろん、芸術・文化制作に携わることができる高度専門職業人の養成をも重視しています。創造的研究成果を発信する研究者のみならず、最新の学問的知見に裏打ちされた文化創造を担う人材育成をめざします。また社会人入学に対しても門戸を開いており、長期履修制度の活用で、勉学と職業生活などとの両立も可能となるよう配慮しています。

[国際的な場で活躍できる研究者の養成]　言語圏・文化圏を横断する現代の文化現象を扱う本専修では、大学院生にたいして、国際学会での発表、研究成果の英語による発信、大学内外の制度を活用した海外研修への参加を奨励し支援しています。

https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/academics/graduate/languages-and-culture/arts

専修の特色

教室行事

[論文指導]　発表会（月1回）、合同中間発表会（年に2回から3回）

[表現文化学会研究発表会]　毎年11月下旬ないしは12月初旬に開催。その時に、卒業生を交えたホームカミングパーティをあわせて開催。

[研修旅行]　教員・大学院生・学部生による1泊2日の研修旅行。毎年9月頃に実施。美術館等で研修を行い、専修・教室の親睦を図る行事。

出版物

雑誌『表現文化』を毎年3月に発行。現在8号まで刊行しています。内容は教員・大学院生・大学院修了生による論文、研究ノート、授業報告、修士論文・卒業論文の要約、優秀レポートなど。機関リポジトリに登録されており、以下の URL から閲覧できます。

http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository

その他の特色

[大阪市立大学表現文化学会]　本専修の教員・大学院生・大学院修了者によって構成された学会です。機関誌『表現文化』を発行し、年1回「研究発表会」を開催しています。

[研究会]　教員主催による「研究会」も開かれています。

所属教員

野末　紀之（19 世紀末文化論、身体と芸術に関する研究）

高島　葉子（説話・伝承の比較文化研究）

増田　聡（音楽学、大衆文化研究、文化所有論）

海老根　剛（表象文化論、ドイツ研究）

野末 紀之 教授

NOZUE Noriyuki

専門分野
表現文化学

最終学歴 ▶ 京都大学大学院文学研究科
学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

19世紀後半のイギリス文学、とくに唯美主義の研究を中心に行なっている。近年は、ウォルター・ペイターの文体と文体観とを、同時代の政治思想や社会的文脈から読み解くことにより、非国民とされた唯美主義者の抵抗のあり方に焦点を当てている。また、同時代の男性同性愛者J・A・シモンズの自伝を、「男性性」やセクシュアリティをめぐる隠蔽と告白の力学および文化・教養への批判という観点で読み解いている。「帝国主義者」とされてきたR・キプリングの読み直しも最近のテーマである。

メッセージ・教育方針

外国語であれ母語であれ、文章を読むことは大変な作業です。論理や表現への細心の注意はもちろん、さまざまな補助線を引いて意味を浮上させる力が求められます。そうした力の養成を通じてはじめて閃きが生まれ、閃きを裏づけることができるようになります。そのときの爽快な気分を味わうべく、ともに研鑽を積みましょう。

［主要業績］

［著書］『文体のポリティクス―ウォルター・ペイターの闘争とその戦略』（論創社, 2018）
［論文］「「人生は文学より価値がある」―J・A・シモンズ『自伝』をめぐって」（『ALBION』復刊 64, 京大英文学会, 2018）
「喪の作法―キプリングの『園丁』」（『表現文化』10, 大阪市立大学大学院文学研究科表現文化教室, 2017）
「共感、論理、自制―後期ペイターにおける「男性性」の再規定について」（『英文学研究　支部統合号』, 日本英文学会, 2009）

高島 葉子 教授

TAKASHIMA Yoko

専門分野
民間説話・民間伝承

最終学歴 ▶ 大阪市立大学大学院文学研究科
学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

比較文化的視点から、日本とヨーロッパおよび東アジアの民話説話・民間伝承を研究しています。文学や思想などのいわゆる高級文化を対象として日本の文化を他文化と比較するのではなく、一般民衆、特に農村の民俗社会に伝わる説話や伝承を比較とすることで、その世界観や自然観の類似点と相違点を明らかにし、これによって異文化理解に貢献することをめざしています。また、口頭で物語を語ることの持つ現代的意義についても研究を進めています。

メッセージ・教育方針

研究には知的好奇心、独創的発想が重要ですが、大学院での研究にはこれだけではなく、自分の研究に社会的意義があるのかどうかを考えることも重要です。研究者も社会の一員である以上、研究を通していかに社会に貢献できるのかが重要な課題であることを認識しておいて下さい。

［主要業績］

［論文］「ケナシウナルペ―アイヌの山姥」（『比較文化研究』第 61 巻（別冊）, 2003）
「アイヌとケルトの異類婚姻譚―カムイと人の婚姻と妖精と人の婚姻」（『説話・伝承学』第 14 号, 2006）
「民間説話・伝承における山姥、妖精、魔女」（『人文研究』第 65 号, 2014）
"Successful Marriages between *Kamuy* and Humans in Ainu Folktales: A Comparison with Animal-Human Marriages in Northern Hunting Peoples' Tales."（*Studies in Comparative Culture*, No.124, 2016）

増田 聡 教授

MASUDA Satoshi

専門分野
音楽学・メディア論

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院文学研究科
学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

ポピュラー音楽研究を中心とした大衆文化研究。複製メディア技術の発展と普及により生じてきた新たな音楽文化の生産と受容の諸々について、主に美学的な関心に基づいてアプローチしています。録音メディアと作品概念、創作行為と作者性、剽窃・盗作と間テクスト性、人工音声キャラクターの主体性、著作権制度と音楽実践の相関などをこれまでテーマとしてきました。現在は、都市空間における音楽がもつ場所性について関心があり、携帯音響機器やBGM、ご当地ソングなどについての研究を極めてゆっくりと進めています。

メッセージ・教育方針

大学は「勉強するため」の場所ではありません、と言うとほとんどの学生は解せない顔をします。しかし、その中に「なるほど」と合点した表情をうかべる学生がときおり存在し、そのような学生がやがて研究者の道を進んでいくのを幾人も見てきました。「大学は勉強するところではない」のであれば何をするところなのでしょうか。ひとつ考えてみてください。

［主要業績］

［著書］『聴衆をつくる―音楽批評の解体文法』（青土社, 2006）
『その音楽の〈作者〉とは誰か―リミックス・産業・著作権』（みすず書房, 2005）
『音楽未来形―デジタル時代の音楽文化のゆくえ』（洋泉社, 2005, 谷口文和との共著）
［論文］「真似・パクリ・著作権―模倣と収奪のあいだにあるもの」（『コモンズと文化―文化は誰のものか』東京堂出版, 2010, 山田奨治編）
「データベース、パクリ、初音ミク」（『思想地図』Vol.1【特集：日本】, NHK 出版, 2008, 東浩紀・北田暁大編）

海老根 剛 准教授

EBINE Takeshi

専門分野
表象文化論・ドイツ研究

最終学歴 ▶ 東京大学大学院人文社会系研究科
学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

現在の主な研究テーマは次の二つです。（1）20世紀初頭（1900年頃～1930年代）のドイツにおいて幅広く流布し、大きな政治的・社会的影響力を持った「群集」をめぐる言説の展開を言説分析の手法も用いて考察すること。ここでは文学や映画だけでなく、哲学、社会学、心理学などの言説も視野に入れた学際的な研究を行っています。（2）これまで別個の分野として研究されてきた映画の歴史とヴィデオの歴史の比較検討を通して、現在の映像文化の解明に役立つ複数的な動画の歴史への視座を得ることを目指しています。

メッセージ・教育方針

表現文化学専修でなされる研究は多様であり、対象もテーマも一義的に決まることはありません。したがって、幅広い視野と関心を持ちつつも、核となるみずからの問題意識を定め、それを掘り下げていく積極的姿勢が欠かせません。大学院の授業では、先行研究を柔軟に読みこなし、みずからの研究に活かしていく能力の養成を心がけています。

［主要業績］

［論文］「〈大衆をほぐす〉―シアトロクラシーと映画（館）」（『a+a 美学研究』第 12 号, 2018）
「〈映画都市〉としてのマドリード　アルモドバルの初期作品における都市表象をめぐって」（『表現文化』第 9 号, 2015）
"Der Wandel von Kollektivbildern in der Weimarer Republik. Eine Imaginationsgeschichte der Masse und ihre Revision"（Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz, 2021）
「すれ違うふたつのメディア映像―映画とヴィデオを再考する―」（『ASPEKT』45 号, 2012）

アジア文化学専修

文化構想学専攻

専修紹介

アジア文化学専修は、日本を含めたアジア地域における実践的・課題解決的な文化活用の現状と課題、さらには地域に根ざした文化活用の具体的方策や理論化などについての教育、研究をおこないます。同時に文化活用のための基本的な前提となるアジア各地域の文化にたいする理解や地域文化研究、文化人類学研究、比較文化研究のための方法についても学んでいきます。

そのための柱として本専修では、「地域」「共生」「比較」という三つのコンセプトを掲げています。

「地域」とは、多様な文化を生み出した地域的特性であったり、いままさに文化の新たな活用がなされていたりする現場です。文化を理解するためには、文化だけを切り取って考えるのではなく、文化や文化現象の母体である「地域」についての理解が必要です。

「共生」とは、多様な文化が文字通り共生を果たしている状態であり、またそのような状態へ向かおうとする価値のことです。文化間の共生、伝統と現代性との共生など、アジア地域では文化の「共生」が大きな課題として存在しています。ある文化に固執すればそれは文化の対立や衝突しか生み出しません。いかに共生的な文化を構築していくのか。アジアへのアプローチには「共生」への志向が欠かせません。

「比較」とは、アジア文化を理解する上での大切な視点です。文化をひとつの視点から理解しようとするだけでは、ときとして一面的な見方にとどまってしまいます。地域間の比較はもちろんのこと、過去と現在との比較、研究対象とする文化コンテンツ同士の比較など、さまざまな「比較」をとおして、物事を相対化してとらえなければなりません。

本専修では、これら三つのコンセプトをもとにしながら、それぞれの地域や社会の特性に応じた文化の活用を考えていきます。ビジネスの素材や集客のための訴求力として、対外的なソフトパワーとして、共生的社会実現のための土台としてなど、現代アジアで文化が活用される場は多岐にわたっています。地域の特性を踏まえた文化の活用は、アジア地域にとどまらず現代社会に通底する重要な課題であり、本専修の教育、研究は、現代社会の課題解決にも大きく寄与するものとなるはずです。

教育方針

研究の対象としては、日本を含めた東アジア、東南アジアにおける文化·文学や文化活用をテーマにすることができます。また、西洋などアジア以外の文化や普遍的に広がる現代文化との関係のなかでアジア文化をとらえるといったことも可能です。

研究指導については、どのような研究テーマであっても、しっかりとした文献読解とフィールドでの観察や調査の両方をバランスよくおこなうように指導します。本専修は、専門分野、対象地域、研究方法を異にする教員から構成されていますが、その強みを活かして、教員が集団で指導することで、多様な研究対象や多彩な方法論についての学修ができるような体制を取っています。

修了生には、アジア地域にたいする広い視野と専門性をもとに、地域社会から国際社会まで、幅広い領域での活躍が期待されています。具体的には、アジアと関わりのある商社、金融、保険、小売、旅行業等や、JICA、国際交流基金、NPO 法人などの専門的な職業、さらには研究者や大学教員などが、進路として想定されます。

本専修は、皆さんに自由かつ創造的な環境を提供しながら、教育、指導に努めて参ります。

専修の特色

教室行事

2020年度から新たに発足した専修です。教室行事や、専修のカリキュラムとは少し離れたアジア研究に関する活動なども、皆さんとともにひとつずつ創り上げていきたいと思います。

その他の特色

アジア文化学専修は、アジアに関心がある皆さんを歓迎します。アジアの料理が好き、アジア映画をよく見る、アジアに旅行に行ったことがある・・・等々、アジアへの関心はどのようなものでも構いません。アジア文化学専修の教員が、皆さんが抱いている個人的な興味や関心を、研究という枠組みのなかであらためてとらえ直すことができるように支援します。

所属教員

松浦　恆雄（中国近現代文学、中国演劇）

多和田　裕司（文化人類学、東南アジア地域研究、現代アジア文化）

堀　まどか（国際日本研究、比較文化学、日本語文学）

宋　恵媛（朝鮮、ディアスポラ、ジェンダー、在日朝鮮人）

松浦 恆雄 教授

MATSUURA Tsuneo

専門分野
中国文学・演劇

最終学歴 ▶ 神戸大学大学院文学研究科修士課程
学　　位 ▶ 博士（文学）

［研究内容］

中国語圏における20世紀以降の文学・演劇を、主にテクスト中心に研究しています。文学では、廃名という作家や穆旦という詩人が切り拓いた現代性について考えています。演劇では、20世紀以降、大量に出回るようになった紙媒体（唱本、番付、小冊子、チラシなど）の系統的な整理を進めています。こうした実際の舞台の雰囲気を伝えてくれる資料から、20世紀の演劇史を見直し、文化再創造の手がかりを見つけようと思っています。

メッセージ・教育方針

大学で教員が学生に伝えることができるのは、学問の面白さとテクストを読む力だと思います。この両者は切り離せません。テクストの内容をより正確、かつ多様に読む力は、教員と学生が向かい合って授業をすることを通してしか伝えられないと、私は信じています。読む力がついて始めて、学問の醍醐味、奥深さに触れることができます。じっくりと学問、テクストに取り組む辛抱強さも必要でしょう。

［主要業績］

［著書］『帝国主義と文学』（研文出版 ,2010, 共編）
『濱文庫戯単図録　中国芝居番付コレクション』（花書院，2021，編著）
［訳書］『禅の味―洛夫詩集』（思潮社，2012）
［論文］「古風な台湾モダニスト―楊雲萍」（『日本中国学会報』70号，2018）
「説明書、無線電与越劇戯考」（『戯曲研究』第 113 輯，2020）

堀 まどか 教授

HORI Madoka

専門分野
国際日本研究・比較文化学

最終学歴 ▶ 総合研究大学院大学(国際日本研究専攻)
学　　位 ▶ 博士（学術）

［研究内容］

「境界の文学、文学の境界」をテーマに、比較文化や文芸交流史の研究を行っています。
1）２０世紀転換期の知識人や詩人の研究。（野口米次郎など）――象徴主義、神秘思想、「東洋」への関心空間と、モダニズムの芸術運動の歴史と人的ネットワークを探る。
2）日本の文化・芸術・文学の普遍性と特殊性――どのように国外に発信され受容されて、また国内で再構築され、また国際的なモダニズムの芸術潮流につながっていたか。
3）戦前戦後の日本語文学の研究――国民国家の集団的記憶に関わり、思考方法や倫理観、文化意識に影響を与えている「文学」を研究することの可能性とは？

メッセージ・教育方針

大学院では、失敗を恐れず、結果よりプロセスを重視して幅広く挑戦してみましょう。既存の枠にとらわれず、しなやかに、少し頑固に研究してみたい人。幅広い好奇心と疑問を持ち、人間やその歴史を愛し、簡単にめげない人。大阪という個性的で闊達な都市で、人文学研究の可能性、そして自分自身の可能性について、拓いてみませんか？

［主要業績］

［著書］『「二重国籍」詩人　野口米次郎』（名古屋大学出版会，2012，単著）
『バイリンガルな日本語文学：多言語多文化のあいだ』（三元社，2013，共著）
『近代日本とフランス象徴主義』（水声社，2016，共著）
『野口米次郎と「神秘」なる日本』（人文書院，2021，単著）
［論文］"Yone Noguchi's Introduction of Noh and Kyogen to the West and East"（*Urban Scope: E-journal of UCRC*, no.9, June, 2018）

多和田 裕司 教授

TAWADA Hiroshi

専門分野
文化人類学

最終学歴 ▶ 大阪大学大学院人間科学研究科
学　　位 ▶ 博士（人間科学）

［研究内容］

文化人類学の立場から東南アジア地域研究、とくにマレーシアのイスラームを対象とした研究をおこなっています。グローバル化や国民国家体制、消費社会の進展等を特徴とする現代社会にあって、イスラームの実践がどのように変化する（あるいは、変化しない）のかについて、理論的検討やフィールドワークを通して考えてきました。今後は、イスラーム的価値やイスラームの実践のなかに、現代社会が抱える課題の解決への手がかりを探っていきたいと思います。そのなかで、文化の社会的活用の具体的な方策を検討していきます。

メッセージ・教育方針

研究分野からフィールド調査中心の指導と思われがちですが、指導の基本は読む力の養成に置いています。学術的な文章を読みこなせないかぎり、学術論文が書けるはずはありません。読む力を養うためには、とにかく「読む」ことです。自分の研究に関係する文献はもちろんのこと、専攻分野の代表的著作は一通り読んでほしいと思います。

［主要業績］

［著書］『イスラーム社会における世俗化、世俗主義、政教関係』（上智大学アジア文化研究所，2013，共編著）
『複ゲーム状況の人類学：東南アジアにおける構想と実践』（風響社，2014，共著）
［論文］「文化を売る：マレーシアにおけるふたつのソフトパワーをめぐって」（『人文研究』第64巻，2013）
「観光の時代におけるイスラーム：マレーシアの事例から」（『人文研究』第65巻，2014）
「マレー・ムスリムたちのクリスマス：ムスリムの行為におけるイスラーム外的要因」（『人文研究』第68巻，2017）

宋 恵媛 准教授

SONG Hyewon

専門分野
コリアンディアスポラ研究・在日朝鮮人研究・ジェンダー研究・日本研究

最終学歴 ▶ 一橋大学大学院言語社会研究科
学　　位 ▶ 博士（学術）

［研究内容］

二十世紀以後の朝鮮人たちの文化について研究しています。とくに、植民地支配と冷戦下での国家分断を経験する中で生み出されたコリアン・ディアスポラが、それぞれの地でいかに文化を継承、あるいは創造していったのかを解明することを目標にしています。従来の文学・文化研究の枠組みを問い直しながら、これまで様々の要因によって声を奪われていた人々の声を聞き取っていきたいと考えています。ジェンダーの視点はそのことと不可分のものです。

メッセージ・教育方針

なぜ、何のために研究をするのかを明確にし、そこに到達するには何をすべきかを自分で考えることが、まず肝要です。アカデミアの傾向や流行の影響を免れることは難しいですが、それを相対化する視点を持って、自らの課題を見極めていくことも必要だと思います。視野を広く持ちながら、文献や資料には辛抱強く、研究対象には誠実に向き合って下さい。新たな知見や発見は、その先にある（かもしれない）ものだと考えます。

［主要業績］

［著書］『「在日朝鮮人文学史」のために：声なき声のポリフォニー』（岩波書店，2014／소명출판，2019〔ソウル〕）
［編著］『在日朝鮮女性作品集：一九四五～八四』（緑蔭書房，2014）
『在日朝鮮人文学資料集』（緑蔭書房，2016）
『続在日朝鮮人文学資料集』（緑蔭書房，2020，共編）
［訳書］Pratt, Keith L『朝鮮文化史：歴史の幕開けから現代まで』（人文書院，2018）

文化資源学専修

文化構想学専攻

専修紹介

専修名の「文化資源学」は21世紀に入ってから本格的に注目されるようになった新しい領域の学問です。一般に文化的な所産というと、国宝や重要文化財に象徴されるような文化遺産をはじめとした遺跡・史跡や著名な芸術作品などがイメージされがちです。実際に類似の専修名を冠した他の大学院では、こうした所産の資料化や保存のあり方を教育・研究の中心としていますが、本専修ではそれよりも遥かに広い範囲の「文化」的な所産に「資源」としての価値を見出し、文化を社会の中で積極的に活用するための理論や実践について検討します。

文化資源学専修が研究対象とする「文化資源」は多岐に渡ります。先に挙げた文化遺産等の歴史・芸術的所産はもちろんのこと、これに加えて現在進行形で生み出されていく最新の文化的所産までをも視野に収めます。また絵画や彫刻、建築といった美術史学が対象としてきた範囲、歴史的な街並みなど、地理学や都市計画学が対象としてきた範囲の、いわゆる「モノ」としての文化事象を研究対象とするだけでなく、東西の演劇、戯曲の上演や、アートプロジェクト、ワークショップ、観光ガイド・ツアーなどの「コト」としての文化事象にも着目します。具体的には、アート（特に美術・音楽・演劇）とツーリズム（観光・地域創造）に関連する文化資源のあり方を捉え、これを中心に研究していくことになります。さらにそれだけでなく、そうした文化の社会的な活用のための企画や実践についても研究対象とします。

教員スタッフの専門は、演劇学、表象文化論、美術史学、博物館学、観光学、社会学、芸術療法、アートマネジメントとさまざまです。また所属する院生の背景や研究テーマも多様で、社会人院生も多く在籍しています。これまでの伝統的な学問分野を基礎としつつも、文化資源という共通のキーワードのもと、領域横断的かつ情報交流的な教育研究環境が整っていることが大きな特徴です。

教育方針

【複眼的視野を持った研究者の育成】 それぞれに専門の異なる教員スタッフが在籍している利点を生かし、学生指導にあたっては、専門分野に即した主担当教員に加え異なる専門分野の教員が副担当としてこれにあたります。学生は、様々な専門分野のそれぞれの方法論を吸収し咀嚼した上で、広い視野に基づく研究を自ら実践していくことになります。単一分野の視座や方法論にこだわりすぎない複眼的視野を持つ研究者を育成します。

【文化活用実践の担い手を育成】 広い範囲での「文化資源」を研究対象とする本専修では、修了生の進路として芸術分野、観光分野等におけるクリエイティブな研究成果を発信する研究者のみならず、文化活用実践の担い手となる人材の育成も目指しています。具体的には、地域活性に関わるシンクタンク職員や観光実践の企画やマネジメントに関わる専門職（DMO 職員など）、博物館施設等の学芸員、ミュージアム・エデュケーター、地域に根ざしたアートプロジェクト・イベントを企画実施する専門スタッフなどが想定されます。そのほかにも文化財科学、アーカイブズ学の実践を行う現場における専門職なども考えられます。

【専門的職業人の育成】 本専修では社会人入学に対しても門戸を開いており、長期履修制度の活用で、勉学と職業生活などとの両立が可能となるよう配慮しています。既に本専修が対象とする学問分野やそれに近い領域での実践を行ってきている社会人学生（前項を参照）については、専修での専門研究によって実践を裏付ける学問的知見を身につけてもらい、さらなる専門的職業人としての飛躍を後押ししていきます。

専修の特色

教室行事

この「文化資源学専修」は、大阪市立大学で2020年度から始まった新しい専修です。ですから、学生の皆さんとともに、本専修の特色を紡ぎ上げていくことになります。

現時点で構想している事柄は以下の通りです。

「大阪市立大学文化資源学会」（仮称）の設立および学会行事の開催

専修内で学会を組織し、その構成要員としては、文学部文化構想学科文化資源コースおよび大学院文化資源学専修の学生、および本専修の教員を想定しています。学会行事としては「卒業論文中間発表会」「修士論文中間発表会」（毎年10～11月頃）、「卒業論文成果報告会」「修士論文成果報告会」（毎年2月～3月頃）などを考えています。また機関誌（タイトル未定）を発行し、ここにコース、専修に所属する学生や教員の研究成果を掲載していきます。

研修旅行の実施

教員、学部生、大学院生による一泊二日程度の研修旅行実施を企画しています。毎年、秋ごろの開催を想定しています。

合同ゼミナールの実施

教員、学生全員が参加する合同ゼミナールを毎月1回程度の割合で実施。学生個々の研究について、教員、学生による自由な討議を行います。

所属教員

小田中　章浩（表象文化論、比較演劇史）

菅原　真弓（美術史学、文化資源学、博物館学）

天野　景太（観光学、社会学、都市社会文化論）

沼田　里衣（コミュニティ音楽療法、臨床音楽学）

小田中 章浩 教授

ODANAKA Akihiro

専門分野
演劇学・表象文化論

最終学歴 ▶ 早稲田大学大学院文学研究科
学　　位 ▶ 博士（文学）

[研究内容]

フランス現代演劇への関心を研究の基本的な柱としつつ、そこから西洋の近代演劇（モダンドラマ）に関する考察、さらには日本の伝統演劇と西洋演劇の比較演劇的な視点からの探求を行っている。その背景にあるのは演劇を生み出す歴史や政治的な制度への関心である。最近行った研究として西洋演劇的な観点から見た人形浄瑠璃の研究があり、今後行う研究として戦争と演劇に関する考察（第一次大戦中のフランス演劇）がある。また演劇とその周辺領域、たとえば演劇と教えることの関係性、あるいは演劇に限らず他の表現領域に通底する問題系（たとえば映画や小説に見られる記憶喪失というモチーフ）も関心領域の中に含まれる。

メッセージ・教育方針

情報が氾濫する現在の世界では，大学における伝統的な「知」のあり方が問われている。そうした状況で学ぶ学生に必要なことは，専門分野について深く学ぶことは当然として，今後知的な世界で生き延びていくための強靭な知性と，進んで異分野の専門家との対話を求めていく，いわば「ケモノ」的な発想と行動力である。そのための「生きた哲学」とスキルを伝授しなければならないと考えている。

[主要業績]

［著書］Akihiro Odanaka and Masami Iwai. 2021. *Japanese Political Theatre in the 18th Century: Bunraku Puppet Plays in Social Context*. London and New York: Routledge.
『東アジア古典演劇の伝統と現代』（勉誠出版，2019，共著）
『モダンドラマの冒険』（和泉書院，2014），『フィクションの中の記憶喪失』（世界思想社，2013）
『現代演劇の地層―フランス不条理劇生成の基盤を探る』（ぺりかん社，2010，第 43 回日本演劇学会「河竹賞」受賞）

天野 景太 准教授

AMANO Keita

専門分野
観光学・都市社会文化論

最終学歴 ▶ 中央大学大学院文学研究科
学　　位 ▶ 博士（社会学）

[研究内容]

「観光」を社会現象として捉え、現代観光の社会・文化的な特質を、主に社会学的な視点から読み解くことを課題としています。具体的には、相互に関連しあう以下の4つのテーマ、①アーバン･ツーリズムの総合的研究、②都市や地域における人々や文化の結節点（駅や盛り場空間など）の生成と展開に関する研究、③ニュー・ツーリズムの観光文化論、④観光行動におけるメディア・コミュニケーションの役割に関する研究、について、国際比較を念頭に置きつつ、日本をフィールドとしながら探求しています。

メッセージ・教育方針

種をまかず、肥料をやらなければ美味しい果実は実りません。大学（院）での学びも同じで、果実だけエレガントにいただく、つまり出来合いの理論や学説をつまみ食いするだけではなく、ものごとを一から地道に考え抜く実践こそが、迫力を持った研究成果を導きます。私も学生の皆さんとともに思考し、試行錯誤する姿勢をもって授業に臨みたいと考えています。

[主要業績]

［著書］『都市・地域観光の新たな展開』（古今書院，2020，共著）
『「観光まちづくり」再考：内発的観光の展開へ向けて』（古今書院，2016，共著）
『東京の社会変動』（中央大学出版部，2015，共著）
［論文］「レトロツーリズムの文化論：昭和の表象が織りなす観光のアクチュアリティ」（『日本観光学会誌』第 58 号，2017）
「携帯位置情報ゲームと観光経験：ゲーミング・ツーリズムの実態と展望」（『論叢国際関係学部篇』第 16 巻第 67 号，2011）

菅原 真弓 教授

SUGAWARA Mayumi

専門分野
美術史学・文化資源学・博物館学

最終学歴 ▶ 学習院大学大学院人文科学研究科
学　　位 ▶ 博士（哲学）

[研究内容]

日本美術史。特に幕末から明治期にかけての媒体（版画、主に浮世絵版画）に関する研究が主たるテーマ。大転換期であった明治維新とその後の社会制度の激変は、常に時代の流行を描き出してきた浮世絵の世界にも大きな変革をもたらしました。そして皮肉なことに、時代に取り残された浮世絵はついに終焉を迎えます。単に「美しい」と愛でられる絵画ではなく、時代背景（社会的、政治的な）と密接な関係を持つ美術に関心があります。今後まとめようと思っている浮世絵版画の受容史はそうした関心が基で生まれたもの。

メッセージ・教育方針

研究に対するスタンスとして私が大切にしていることは「愚直」であることです。楽をして手っ取り早く成果をあげようとせず、資料を集めたりフィールドワークによってサンプルを集めたり、といった基礎的な勉強を「愚直」に行って欲しいと思います。世界がアッと驚くような研究だって、最初の一歩は小さなものだったはずですから。

[主要業績]

［著書］『浮世絵版画の十九世紀～風景の「時間」、歴史の「空間」』（ブリュッケ，2009）
『謎解き浮世絵叢書　月岡芳年「和漢百物語」』（二玄社，2011）
『月岡芳年伝　幕末明治のはざまに』（中央公論美術出版，2018，第69回芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞）
［論文］「浮世絵研究の功罪～近代における浮世絵受容とその波紋～」（『美術史論集』神戸大学美術史研究会 第 18 号，2017）
「宇多川文海と『南海鉄道旅客案内』」（『帝塚山派文学学会紀要』5 号，2021）

沼田 里衣 准教授

NUMATA Rii

専門分野
コミュニティ音楽療法・臨床音楽学

最終学歴 ▶ 神戸大学総合人間科学研究科
学　　位 ▶ 博士（学術）

[研究内容]

障害のある人を含む様々な人々が、技術や価値観の差異を超えて音楽作りをすることについて、実践と理論の両面から領域横断的な研究をしています。関連領域は、音楽療法をベースとして、音楽学、即興音楽、コミュニティ音楽、アートマネジメント、障害学など。実践研究として、主に知的障害者を対象とした即興表現活動も続けています。現在は、音楽や舞踊などの非言語的表現とともにある言語的対話について着目し、研究を進めています。

メッセージ・教育方針

研究に際して、まず大切なのは、「問い」を設定すること。その問いを深めていく旅こそ、研究の醍醐味です。その旅路には、自らとの対話、書物との対話、研究者との対話、そして対象領域に関連する様々な現場の人々との対話が含まれるでしょう。多様な知を吸収しながら多くの発見が得られるよう、応援していきたいと思います。

[主要業績]

［著書］『障がいのある人の創作活動―実践の現場から』（あいり出版，2016，共著）
『ソーシャルアート：障害のある人とアートで社会を変える』（学芸出版社，2016，共著）
『公共文化施設の公共性　運営・連携・哲学』（水曜社，2011，共著）
［論文］「『 動いている音楽』―社会的課題と結びついた即興音楽の美的戦略に関する一考察―」（『日本音楽即興学会誌』第 5 巻，2020）
「臨床音楽学研究試論：音遊びの会」の事例を通して」（『日本音楽療法学会誌』第 17 巻第 2 号，2017）
“The Otoasobi Project: Improvising with Disability”（Music and Arts in Action, Vol.5(1), 2016）

杜 一葦 DU Yiwei

箕面山荘 風の杜勤務
アジア都市文化学専攻＊　2019年度前期博士課程修了
＊2020年4月、アジア都市文化学専攻に代わって「文化構想学専攻」新設

所属
アジア都市文化学専攻

研究テーマ
清代妖怪譚の受容をめぐる日中比較

修士論文題目
日中における『聊斎志異』「画皮」の受容と変遷 ―近代の妖怪学の隆盛から現代まで

文学研究科を選んだ理由

学部4回生の頃、私は1年間の交換留学の機会を得て本学で学びました。そこではたくさんの出会いがありました。私は学部生の頃から、妖怪関係の研究をしたいと思っていましたが、中国の大学では、この研究テーマで大学院に入るのは無理だろうとよく言われました。進路に悩んでいたとき、本学のある先生が相談に乗ってくれました。私が妖怪研究をしたいと話したら、アジア都市文化学専攻でなら自分の好きなように研究できるとおっしゃったのです。その瞬間、ここに入ろうと決めました。

当時の交換留学の1年間で、市大そのものを好きになったというのも大きな理由です。市大の授業はもちろん、便利で資料豊富な学術情報総合センター（図書館）、留学生が自由に寛げるグローバルビレッジや、田中記念館のそばでときどき寝転んでいる猫ちゃんまで、私は大好きです。

研究内容

私は中国の清の時代に書かれた志怪小説『聊斎志異』の一作・「画皮」という話を通し、日中の「鬼」の概念の変遷を辿り、妖怪学の隆盛の視点から、日中における『聊斎志異』「画皮」の変遷と受容について研究しました。

文学研究科での学び

アジア都市文化学教室での2年間は、観光学・文化人類学・比較文学などの知識から、修論を書くのに必要な様々な能力など、ここでうまくまとめるのが難しいぐらい、たくさんのことを学びました。ゼミは、文献を読み、まとめ、質問をすることが基本的な形式となっています。それで1年目は、ひたすら文献を読み、まとめる毎日でした。一見単純な作業かもしれませんが、そこから学んだものは多かったです。例えば、文献を読む能力です。文献を読む能力は論文を書くにも必要不可欠ですが、留学生の私にとって日本語で書かれた学術書や論文を理解するのはやはり難しかったです。文献の主旨をまとめた上で、更にゼミ中にみんなで議論するための質問も考えなければいけないので、文献の内容をただ鵜呑みにするわけにはいきませんでした。その1年間を通し、読む力は確実に鍛えられたと実感しています。また、他の学者が書いた本や論文を読むことで、研究の仕方、論文の書き方なども勉強できました。

大学院での2年間は、修士論文を執筆する2年間でもあります。進度を報告する総合ゼミがときどき開催され、先生方の指導の下で少しずつ論文を仕上げていきます。完成した修士論文には未熟なところもありますが、大いに勉強して書き切ったことには満足しています。2年間をかけて1つの作品を作っていく経験は、これからの人生の糧にもなると思います。

将来の目標

今は日本社会と文化をより深く体験・経験するために就職することにしましたが、いつかは後期博士課程に進み、研究をつづけたいと思っています。日本での生活が落ち着いたら、また戻ってきたいです！

受験生へのメッセージ

充実した2年間を送ってください。市大での時間はあなたの人生にとって必ず貴重な経験になります。